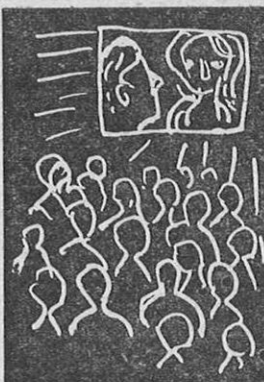


青少年映画



たかまつた映画熱……★

「太陽の季節」を初めとして「処刑の部屋」「狂った果実」などいわゆる（太陽族映画）が氾濫するようになってから一段と青少年の映画に対する関心が強くなってきました。同時に映画の指導、映画に対する批評眼を高めて青少年の環境対策をはかろうとする機運も全国的にたかまり、県でも昭和三十三年に青少年映画等専門委員会を設け、青少年向推せん映画の選定、有害映画の観覧規制の自主的運動を実施してきています。この年間

じく全国映画の自主規制の機関である映画倫も規程を強化し、民間第三者による公正な管理を実施することになりました。そして、県でもこれに習って、委員は民間の業者、学校、父兄など第三者の努力による自主規制を行うようになりまし

成人映画とは……★

成人の観賞には適当であつても、青少年の心身が未成熟である点を考慮して、批判力が乏しいため誤解を生じたり、悪影響のあるもの、著しく性感を刺激するもの、粗暴性を助長するものなどを示しています。

青少年向映画について……★

これは、青少年の生活向上に役立つと思われるものですが、県青少年映画等専門委員会選定され、町村、公民館、婦人会、を通して、その結果を連絡してきます。しかし、各町村についての周知状況はまだ不十分の感があるようです。各市町村においては学校関係、公民館婦人、青少年関係団体が各種の会合において青少年に正しい映画の指導が行われ

ることが大切なことでもあります。

青少年と映画……★

映画についてのアンケートを、県下の小、中、高校生を対象に調査した結果、男の生徒は八〇%が「映画は好き」、「きらい」が二〇%となっています。又、月に男は三回、女は二回程度は映画を観ている。さらに（太陽族映画）に批判的なものが三〇%、無関心が四〇%。以上考

健全な地域の文化を……★

映画のように強い影響力をもつものを選び、さらにこれを良い文化財としてすすめ、児童に健康な環境を与えることがひいては、社会的条件を改善し、青少年の人格を形成することにもなるわけです。このような問題は、個々の問題というより、地域の問題であつて、とかく忘れがちな問題ですが、児童育成の基礎は社会すべての人によって形成されることをもう一度考えなおしてみたいものです。

（婦人児童課）

働く婦人に共通の問題を討議し合い

解決につとめようとして早くから県下の労政事務所ごとに「勤労婦人懇談会」が結成されていて、全国でも特異な行事として注目されています。

その第三九回熊本地区勤労婦人懇談会が四月二十四日、婦人約百名が参加して、熊本市中央紡績株式会社内で開かれました。

そこでその懇談会の内容を二、三ひらつてみることにしました。

働きよい職場を……

—職場女性の叫び—



（男女平等の問題） 女はよきにつけ

悪しきにつけ男から批判される。男はほとんど昇給するが女はとくおくらされる。職務上の会合には婦人は無視されているのに、レクリエーション等ではまづ先に狩出されるなど。

家庭をもつ勤労婦人にとっては、一日の休日は大変貴重で日直はしたくないが男女平等だといって、日直をさせられるということ。逆に収入を増すために自ら日直することを要求したという職場もあつた。労働基準法では健康保持のために超過勤務を制限されているが、反面経済的利益を放棄させられると、訴えていた。

（生理休暇） 大抵の職場では生理はあまりとっていない。生理をとるまでは他をはばかって勇気がいったが、とる習慣がつくととりやすいという意見が多かつた。

生休をとれば皆勤手当が出ないので、苦痛をおして出たり、年次休暇で休んだりする例がかなりあつて、収入維持のためには無理しないわけにはいかないとい

う勤労者の家計の苦しさを訴えたものもあつた。

苦痛がなればとらなくてよいとする意見に対し、皆が気がねなしに休めるようにするためには女は誰でも生休をとるべきだとの意見があつた。これには、全体のために休むというのはよくない、具合の悪い人はゆつくり休みなさいという理解のある男も含めての環境をつくる必要があり、それには平素の女の仕事振りが大切だということになった。

（既婚者と未婚者） 結婚即退職とい

う声が開かれ婦人の職場が狭められつつある昨今だが、反面結婚後も働いている職場も多い。授乳時間を休憩時間の他に設けてある職場もあるが、授乳時間一杯では用が足せず交替におくれることが多くその分まで働いている未婚の人達から不平が出る人が多い。休憩時間中に行っているのはお母さん従業員と一目でわかるという。又企業合理化が進められ、まづ先に対象にされるのは高令婦人や既婚婦人であるなど。

（労政課）

編集雑感

広報はその性質上、固い記事が多いようだが、その内容が自分たちの身近なことなので、案外読んでくれていることがわかつた。このほど、行った実態調査の結果によると、八〇%以上の家庭（広報は全戸毎月無償配付）が読んでいるというデータが出た。特に、自分のこと部落のことなど、記事に出ると、とてもうれしらしい。それでも、町民に親しまれる広報となると仲々編集がむずかしい。記事次第では、宣伝や指導育成といった親切と押しつけるようになって読む方はうんざりしているだろうと、いつも反省している。

編集で、先ず問題になるのは、見出しであるか。そのものスバリの見出しは紙面全体生きてくる。先ごろ、青年団の機関紙編集を手つだつているとき、「夜あそび」というテーマで、男女青年のまる反対の意見が出ていたので、これだと思つて、広報に取上げて見た。横見出しに、「男女青年の見た夜遊び談義」、副見出しには、「男……俺は結婚適令期」

「女……夜遊びは時間のムダ」とつけて、対象的に記事を取上げて見たところ、多数の読者から、現在の青年の気持がよくわかつて、とても面白いと喜ばれた。それでも一、二のお偉い方からは、「夜ばい」の記事なんか広報にのせるとは、ときついお叱りもうけたが。

広報の編集技術の研修会を、毎年一回郡の公民館連絡協議会の主催で開催している。講師には、熊本の牧田、岩下両氏、県広報課の山口氏、社会教育課の斉藤氏など招いているが、これがとてもためになる。自分達のつくった広報の見出しや内容について、卒直に批判指導してもらう。町でも、名編集長などおだてられて、いゝ気になつているが、専門家が見ると、町の広報は一年生の作文位にしか見えない。講師の話聞いて冷汗三斗であるが、また新しい意欲もわく。

編集にたずさわつて、今まで何が一番うれしかつたらうか。それは、一昨年十月熊日で県下の広報コンクールが行われたとき、一位入選し熊日社長賞をもらったときでしょうか。町の皆さんから「町の広報も見直したお目出度う。」といわれたときは、苦勞の甲斐があつたと思ひました。

（植木町社教主事）

鳥山正